



RCA Photophone LMI-32216

こちら1955～1959年の5年間のみ生産されたモノラルパワーアンプで、渋いゴールドハンマートンに塗装されたシャーシに四角い角が丸まった大きな3つのトランスが目を引くデザインとなっている。使用されている真空管はKT66 X2、EF86 X2、GZ32 X1を搭載しており、当時BBC指定のモニターアンプであった英国 Leak 社の TL/12 パワーアンプと良く似た構成で、出力を12Wにおさえた音質重視の設計になっている。音質はクセの無いとてもバランスが良く取れた中域音の再現性が豊かなアンプである。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。

RCA Photophone LMI-32215

1955年から1959年までの5年間のみ生産されたモノラルプリアンプで、電源スイッチを入れるとRCAの赤いロゴマークが光輝くとても美しいパネルを持っている。電源部を持たないため、パワーアンプとの接続から電源を供給してもらう方式になっている。真空管はEF86 X1、ECC81 X2が使われ、フォノイコライザーもLP用が2種類、SP用が2種類用意されている。1957年以降のパネルデザインは若干変更され、表記もNew Orthophonic High Fidelity となり、型式もLMI-32215 Aとなる。



本文 / 田中伊佐資
製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

第19回 RCA Photophone Ltd.

米国でGEの関連会社として創立されたRCA社が1927年頃に英国市場に向けて設立した会社であり、1957年以降はRCA Britain Ltd. となる。社名からもわかるように映画や音響の研究開発、その機材の生産を会社だった。当初はプロ用の音響機器のみを生産していたが、1955年頃には欧米での一般家庭におけるオーディオ市場の拡大にともない民生用のハイファイオーディオのラインアップとなるLMIシリーズの生産が始まる。商品構成はあまり多くなくプリアンプ、パワーアンプ、チューナーをそれぞれ1機種のみとスピーカーが数種類あった。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



RCA 82 B Monitor Amplifier

1940年代にアメリカで録音スタジオや放送局での使用を目的に生産されたプロ用パワーアンプ。シャーシにはパワートランス、チョークトランス、アウトプットトランスの3つが中央に配置され、それらのトランスを囲むように真空管やコンデンサー、ホーロー抵抗などがレイアウトされている。使われている真空管は1622 (6L6G) ×2、1620 (6J6) ×3、5U4×1 と前述のLMI-32216と良く似ていて、その米国製真空管仕様アンプとなっている。といってもこちらの方が開発年代が古くLMI-32216 の原型といえる。出力も出力管6L6が2本で12Wと音質重視の設計がなされていて、当時のWestern Electric 124 パワーアンプも良く似た使用目的とアンプ設計となっており、同レベルのパワーアンプだったと思われる。



RCA Photophone Ltd.

又ケのいい英国に対して 濃い中域で勝負する米国

アトリエJe-teeには前回の「ドームくん」こと、BBCモニターLS3 / 1がまだいた。「あった」よりも「いた」と記したくなる愛くるしいやつだ。今回のテーマはRCA社のプロ用モノラルパワーアンプ。それも英国製と米国製の2種類を聴く。その違いをあきらかにしてもらいたいと、このBBCモニターに引き続き登場してもらったことになった。

英国RCAアンプはLMI-32216というモデル。出力管はKT66を使用。製造は1950年代前半のようだ。米国RCAはTYPE 82-B。出力管はKT66と同じ仲間の6L6G。こちらはちよつと古く40年代後半に製造された。多少の製造時期が違うものの、同じ大手企業RCAが作ったアンプに関して英米のお国柄がどう出るか興味深い。岡田さんが言うには程度がここまでいいアンプが2種類揃うのは珍しいことらしい。

まずはケニー・ドリュエーが晩年に残したトリオによるコペンハーゲン録音盤と比較がスタート。先攻の英国RCAアンプは北欧特有のきりつとした感じをよく表現している。ストレートでモニター的でもあるが、どこことなく端止り品がある。後攻の米国製RCAになると重みと音が粘りが加わる。ドリュエーのピアノに黒さが出てジャズっぽい。米国の音楽には米国アンプということになるか。次に同じくジャズで、ジョニー・ホッ

ジスのアルト・サクセス。とろけるような甘いトーンは英国製。張りがあって透明感がある。米国製はやや重心が低く前に押してくる。それぞれに良さがあり、勝負は拮抗している様子だ。

次にヴォーカルでナット・キング・コール。ヌケがいい英国に対して濃い中域勝負の米国。ほくの好みでいえばキング・コールはわりとさらさらと聴いていたい。小粋な歌手でいて欲しいので、ここは英国アンプのトーンがしっくりくる。クラシックの交響曲となると弦の響きが清新なのが英国製。米国製は中低音が充実していてすわりがいい。心持ちもつたりしているというふうにも受け取れる。岡田さんは「製造時期は英国製が数年ほど新しいので、それがそのまま音に出ているかもしれない」と語った。

オペラの歌声もやはり同じ声という意味でキング・コールと同じような違いがある。英国は力まず肩の力が抜けている。極端に言えばソリッド。米国製はよく脂がのっている。

全体を通して聴いた限りでは、米国RCAがほくの好みだったが「スピーカーが活躍した場所と時代がリンクするビートルズで締めます」と「ヒア・ゼア・ア・ノド・エヴリホエア」がかかる英国製RCAにぐらつと傾いた。ポールの歌声に英国ロック独特の潤いがある。これは思い入れというバイアスが働いているのは間違いないが、そういうこともオーディオという趣味のうちなのだ。